岩手県と秋田県の出生率較差について

渡　辺　吉　利

はじめに

岩手県，秋田県は相隣り合って位置する東北の県であり，戦前においては共に高出生を競い合うような状況にあった．しかし，戦後の全国的な出生率低下の中にあって，秋田県の出生率は比較的早い段階で急激に低下したのに対して，岩手県の低下は緩慢であり，近年（1975年）においてなお，全国でも高出生率の県となっている．

同じ東北の県にあって岩手県と秋田県のこうした出生率水準の違いは，具体的にはどのような差異なのか，その差異はどのような人口学的構造の違いに基づいているのか，人口学的構造の違いの背景としてどのような社会経済的あるいは文化的差異があるのかが問題とされ得よう．

このような問題が解明されるには，もとより，詳細な調査，精密な検討がなされなければならないであろう．

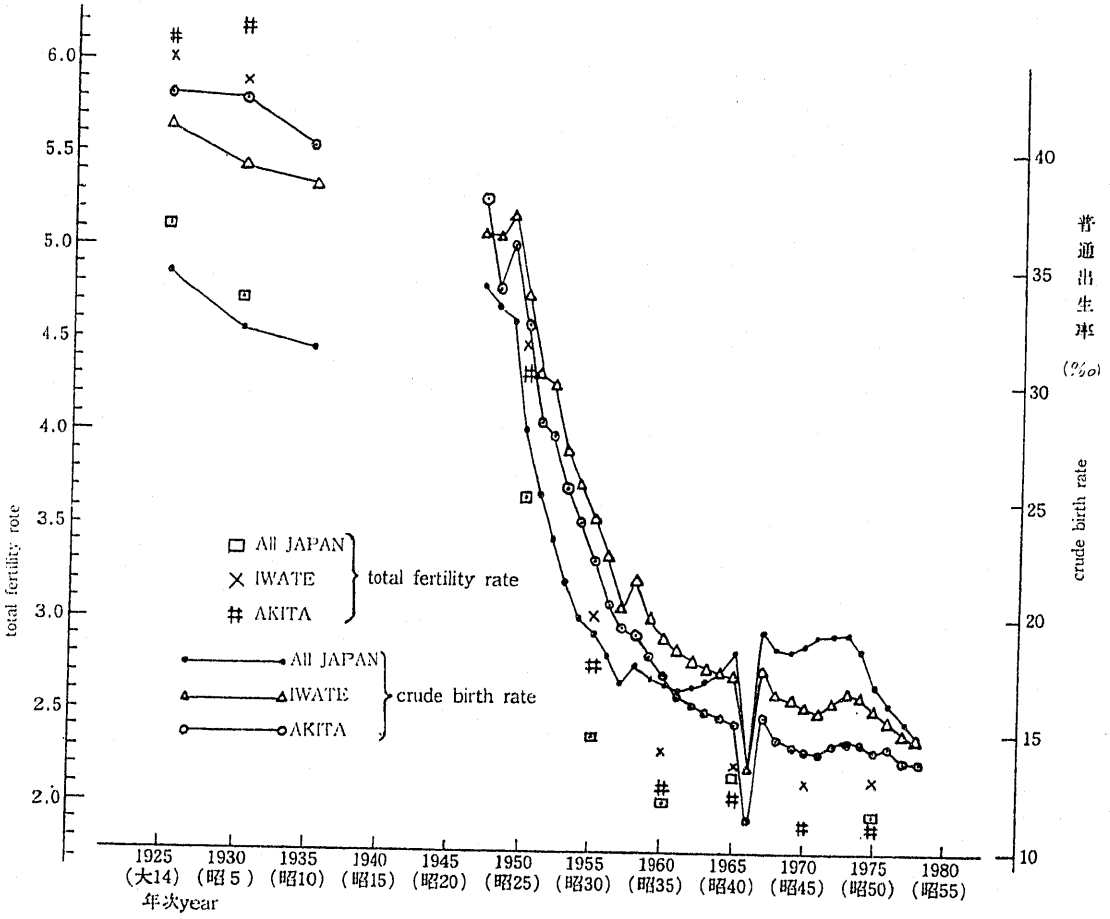
本稿では，とりあえず，第1段階の予備的検討作業のうち主として人口動態統計に基づく期間出生力指標によって岩手県と秋田県の出生率の差異を明らかにする．

岩手と秋田の出生率の差異を明らかにする作業として，最初に合計特殊出生率の推移を概観する．そのあとで，出生の発生基盤である結婚の動向を観察し，次に年齢別特殊出生率，パリティ別出生率

表1　普通出生率，合計特殊出生率，初婚齢令（SMAM）の推移

年次 year	普通出生率 crude birth rate(‰)			合計特殊出生率 total fertility rate			singulate mean age at marriage		
	全国	岩手	秋田	全国	岩手	秋田	全国	岩手	秋田
1920(大 9)							21.165	18.688	18.948
1925(大14)	34.9	41.1	42.5	5.10	6.01	6.11	21.177	18.953	19.091
1930(昭 5)	32.4	39.3	42.3	4.71	5.89	6.17	21.827	19.606	19.815
1935(昭10)	31.6	38.6	40.2	——	——	——	22.515	20.406	20.522
1940(昭15)				——	——	——	23.331	21.400	21.496
1947(昭22)	34.3	36.5	38.0	——	——	——	——	——	——
1950(昭25)	28.1	33.9	32.6	3.64	4.47	4.31	23.609	22.302	22.547
1955(昭30)	19.4	24.3	22.5	2.36	3.01	2.75	24.694	23.356	23.565
1960(昭35)	17.2	19.2	17.6	2.01	2.30	2.09	24.961	23.836	23.858
1965(昭40)	18.6	17.5	15.5	2.14	2.22	2.03	24.811	23.815	23.731
1970(昭45)	18.8	16.1	14.3	2.08	2.11	1.88	24.645	24.035	23.923
1975(昭50)	17.1	16.0	14.2	1.93	2.13	1.86	24.476	24.019	23.952
1976(昭51)	16.3	15.6	14.4	1.84	2.08	1.88	——	——	——
1977(昭52)	15.5	14.9	13.8	1.80	2.00	1.83	——	——	——
1978(昭53)	14.9	14.7	13.8	1.80	1.98	1.84	——	——	——

図1　岩手県と秋田県の普通出生率と合計特殊出生率の推移



をみることによって，岩手県と秋田県の出生率に類型的な差異があるか否かを検討する．

1．合計特殊出生率

まず，合計特殊出生率についてみると（表1および図1参照），戦前の1925年に岩手県6.01（合計特殊出生率の高い府県から数えて第4位），1930年に5.89（第3位）に対して，秋田県は1925年に6.11（第3位），1930年に6.17（第2位）と両県とも全国水準の5.10と比較してその出生率水準はかなり高かった．

戦後の1950年には，岩手県4.47（第4位），秋田県4.31（第7位）と両県の出生率は戦前の水準からは，かなりの低下であった．これは全国的な出生率低下（1950年の全国は3.64）と符節を合わせる動きであったが，他の都道府県および全国との比較では，岩手・秋田両県は，ともに高出生率水準の県であった．

1950年から1960年にかけて，全国的には戦後のもっとも急激な出生率低下の時期を含む期間を経過して，都道府県間の出生率の差は大幅に縮少した．この1960年に岩手県の合計特殊出生率は2.30（第8位）と全国水準の2.01に比較して高い水準を維持したのに対して，秋田県は2.09（第20位）と全国水準により近く，岩手県との間に0.2程度の差をもって低い出生率となった．

1960年以降，1966年のいわゆる「ヒノエウマ」の出生変動を別にして，全国の動きでは，傾向として1970年までは横ばいまたは心もち上向き加減であったが，その後1975年に至って1.93と2を割る水

準となった.

岩手・秋田両県は，1960年以降もゆるやかな低下傾向をみせ，1965年に岩手は2.22と全国水準（2.14）に少し近づき，秋田は2.03と全国水準より低くなった．1970年には岩手は2.11と全国（2.08）とほとんど肩を並べた後横ばい傾向に転じた（1975年，岩手2.13）のに対し，秋田は1970年1.88，1975年1.86と２を割るに至ってから横ばいに転じた.

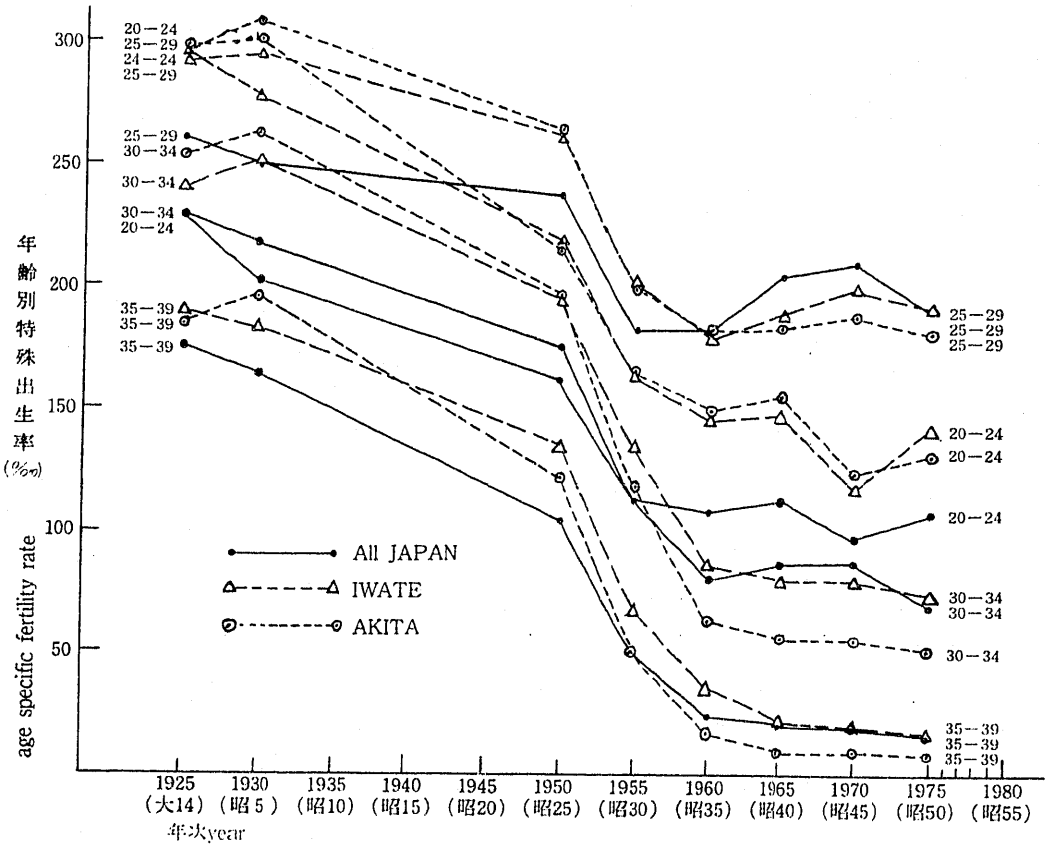
こうして，岩手と秋田の合計特殊出生率は全国的に出生率の差が縮少する中にあって，1975年時点でなお0.2～0.3の差を有している.

2. 結婚の動向

結婚の動向の指標としてここでは初婚年齢をSMAM（singulate mean age at first marriage）[1]によって観察してみよう（表１参照）.

1920年についてみると，全国の21.2歳に対して岩手18.7歳，秋田19.0歳と両県とも全国にくらべ2歳余り早く結婚する．岩手・秋田いずれの地域でも，最近になる程，結婚年齢は遅くなるが，全国との差も縮まり（全国は1960年を最高として，それ以降は逆にわずかだが結婚年齢は低下している），両

図２　岩手県と秋田県の年齢別特殊出生率の推移
（20—24歳，25—29歳，30—34歳，35—39歳）



1）SMAM は，人口静態統計から算出される結婚年齢で，再生産期間の終りすなわち，年齢50歳まで未婚でいるものを除いて，それまでに結婚するもの全員についての平均結婚年齢である．この場合，調査時に把握した年齢別，配偶関係別人口に基づいて算出するため，死亡の影響は考慮していないが，ある期間に発生した発生率ではないので，年齢構造の影響は標準化により考慮していると考えられる.

県の間の差もほとんど無くなる．そして1975年には，全国24.5歳に対して，岩手24.0歳，秋田24.0歳である．

これを要するに，岩手，秋田両県は全国水準より早婚であるが，両県の間には，戦前戦後を通じて結婚年齢に基本的に大きな違いは無いということができる．

3．年齢別特殊出生率

図2は，20歳台と30歳台の年齢階級についてのものであるが，この4つの年齢階級の出生率が合計特殊出生率の中で寄与する割合は，1925年に約85％，1975年には約98％であり，これらの年齢について傾向をたどれば，おおよそのパターンを把握できよう．

20—24歳では，戦前・戦後を通じて岩手，秋田ともその出生率は全国と比較してかなり高く，その反面，岩手，秋田間では，ほとんど差がない．これは，結婚年齢が，岩手，秋田において早いことによる20歳台前半の有配偶率が高いことも影響している．

25—29歳では，戦前には岩手，秋田の出生率は共に高く，全国との間にはかなりの差があったが，戦後，その差に縮まり，1960年には，ほとんど全国と同等となり，1965年以降は同等ないし全国がわずかだが高いといった傾向であった．

30歳以上では，1960年以降秋田の出生率は，岩手，全国とくらべ，かなり低くなっており，特に30—34歳では岩手との差が大きい．ちなみに，岩手・秋田間の30—34歳の特殊出生率の差だけで，合計特殊出生率の値にして0.12～0.13程度の違いを，1960年以降の年次については，もたらしている．

要するに，年齢別特殊出生率では，20歳台前半では岩手・秋田とも出生率が高く，30歳を超えた年齢で秋田の出生率が低い．

4．出生順位別出生率

出生順位別にこれを見ると（表2参照），1960年，1970年のいずれにおいても，第1子の出生を除い

表2　出生順位別出生率（‰）

出生順位	1960			1970		
	全国	岩手	秋田	全国	岩手	秋田
総数	111.61	118.27	103.49	103.92	82.38	71.40
第1子	384.96	430.59	466.15	380.85	398.69	400.25
第2子	197.46	210.31	208.29	185.17	162.90	156.17
第3子	62.25	82.64	65.58	36.74	37.21	20.74
第4子	26.47	47.02	26.95	13.10	15.17	4.80
第5子	31.51	38.36	14.49	8.76	10.01	2.13
第6子	29.21	33.88	13.63	9.09	12.37	2.43
第7子	27.14	30.26	10.00	11.36	13.05	3.38
第8子	26.39	32.03	8.83	15.17	14.78	8.28
第9子	26.70	18.60	7.99	18.62	20.21	3.64
第10子以上	16.24	21.78	6.64	24.97	29.69	12.90

分母には，全国と岩手県，秋田県のそれぞれ1960年，1970年における出生順位 n—1 の15—49歳の既婚女子数を使用した．
分子には，各地域のそれぞれ1961年，1971年における人口動態統計の出生順位別出生数を使用した．

ては，岩手の方が秋田より出生率が高く，とくに出生順位が高順位になるにしたがって，その傾向は著しくなる．

より詳しくみれば，第1子の出生については1960年には秋田の方が出生率が高いが，1970年には，ほぼ同等となる．第2子については岩手・秋田の間には差が小さい．秋田・岩手間の違いが著しくなるのは第3子以降の出生であり，1960年では第5子以上において，1970年では第3子以上の出生率において全国水準の率よりも低くなる．

要するに，秋田においては，出生順位2子までは積極的に生もうという傾向がある（これは岩手も同じ）のに，3子以上では出生をおさえようとする傾向があり，その3子以上の出生抑制傾向は秋田においては岩手の傾向に対してはもちろん全国の傾向よりももっと強いということができよう．

まとめとして

これまで観察した限りで岩手と秋田の出生率の違いを要約すれば，①結婚年齢はともに早く，そのことが両県の20歳台前半の出生率を高めている．②30歳以上の年齢では岩手では比較的活発な追加出生の傾向をみせるのに対して，秋田ではほとんど追加出生はなく30歳を過ぎたら生みおさめという傾向をみせる．③出生順位別には，第2子までの出生は，岩手・秋田ともに旺盛であるが，第3子以上の出生では，岩手・秋田は対照的に，岩手が引き続き比較的旺盛に生み続けるのに対し，秋田では，第3子以上の出生は少ない．

以上の傾向は主として，人口動態統計に基づく期間出生率の観察によるものであるから，長期的に地域の出生力を左右しているコウホートの出生力水準の比較ではどうなるかが今後の課題である．